

梶井基次郎「Kの昇天——或はKの溺死」

——《あなた》の正体——

吉 田 結 季

梶井基次郎「Kの昇天——或はKの溺死」(以下「Kの昇天」)は、『青空』第二十号(青空社、一九二六年十月)に掲載された。

本作は《あなた》の手紙へ《私》が出した返信という体で執筆されている。《私》の視点での現実のみが記されているという点で、全ての描写が事実であるとは言い難い。ドッペルゲンガーというモチーフが持つ怪異性の他に、この現実と想像を曖昧にする書簡体が本作に神秘性を与えていると言えるだろう。自身の体験をかなり忠実に作品へ落とし込む梶井の作品群の中で、フィクションの色が強い本作は幻想小説として独特の立ち位置にある。

先行研究において「Kの昇天」は、大別して二つの切り口から論じられてきた。一つ目は梶井の実体験もしくは他作品との関連を主軸とするもの、二つ目はKや《私》について論じるものである。前者についてはドッペルゲンガーというモチーフを共有する、同作者の「泥濘」が取り上げられることが多い。安藤靖彦は本作に佐藤春夫からの影響を指摘しながら、本作を「泥濘」の《別篇》であると述べる。濱川勝彦は《自然発生的》な《影》と「二重身」という共通点に着目し、また執筆当時の梶井の精神状態について考察しつつ本作の「影」が《梶井の精神生活を補うもの》であったと断じた⁽¹⁾。

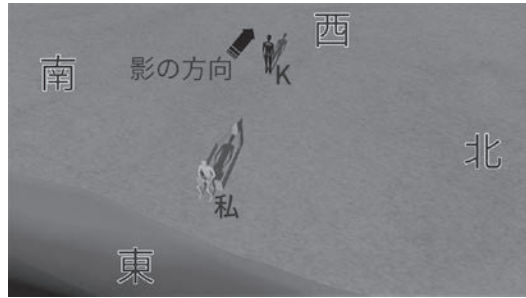
二つ目のKの心境や作品の構図について論じるものでは、島村輝が、手紙は自身がKの《影》であることを自覚した《私》による《告白》と《弁明》⁽³⁾なのだと述べている。また、水島佑は《私》とKの精神性の類似を指摘し、《私》が《現実》と《幻想の世界を同時に持ち合わせ》⁽⁴⁾ていると考察した。

Kや《私》について論じるものには、それぞれの言動に着目したもの他に、その関係性を考察したものが多し。しかし本作にはもう一人登場人物が存在する。《私》に手紙を送ったとされる《あなた》である。《あなた》はいわば語り部に対して観客の役目を果たしているはずであるが、作中における情報の少なさ故に論じられることはあまり無い。

稿者は、謎めいた《あなた》の正体について検討することで、「Kの昇天」の新たな読解を試みる。本論では構成や描写の見直しを通して、Kと《私》、そして《あなた》の関係性や《あなた》の正体について考察していく。

第一章 小説の構成

本章では考察のための準備段階として「Kの昇天」における作中

(図一)⁽⁶⁾

(図二)



人物、特に《私》やKに起こった出来事について確認する。
初めに、Kと《私》がN海岸の砂浜で初めて出会ったときの状況から整理していく。本文の内容は全て『梶井基次郎全集第一巻』（筑摩書房、一九九九年）を元になっている。

病によって眠ることができなかった《私》は、ある満月の晩、漁船の船尾に腰掛けて海を見る。砂浜に押し上げられていてかつ腰掛けることができるのならば、漁船は小さいものであらうと推測できる。船首を陸に向けて停泊しているため、《私》が砂浜の方を見る

際に「(眼を) 転じる」「見返る」という語句が用いられているのであらう。

その《私》に背中を向けてKは自身の影を踏んでいる、つまりKの影は陸の方へ伸びている(図一)。⁽⁶⁾《私》とKが相対したときKからは、逆光によって《私》の身体全体に影が落ちて見えていただろうことが分かる(図二)。島村が指摘するようにKには《私》が、自分の影の実体化、つまりドッベルゲンガーのように見えていたであろう。影に《生物の気配》を認めていた折、《私》が声を掛けてきた時はすわ影が動き出したかと考えたに違いない。Kはこの夜の後、同じ現象によって逆光線の船が影絵のように見えると主張する。わざわざこの描写が挟まれたことも島村の説を裏付ける。この《私》の逆光を讀者へ想起させるために、先の会話は行われたのである。《私》は自覚の無いままKのドッベルゲンガーとなっていたのだと稿者も同様に考察し、今後はその前提のもと論を進めていく。

次に、Kが溺死した夜の描写について述べる。濱川が既に指摘していることではあるが、記述からKの死亡日がある程度推測することが可能である。暦要項を参照したところ、一九二六年五月二十七日の記録が作中の描写と一致した。この描写に創作された点は無いと思われる。

そこで際立つのが以下の描写である。

そしてもう一步想像を進めるならば、月が少し西へ傾きはじめた頃と思ひます。若しさうとすればK君の所謂一尺乃至二尺の影は北側と云つても少々東に偏した方向に落ちる譯で、K君はその影を追ひながら海岸線を斜に海へ歩み入つたことになりま

す。

恐らく、影が落ちる方角のみが《私》とKが初めて会った夜と異なっていたため想像を挟んだのであろう。図一で示したように最初の夜でKの影は陸の方角、西の方角に落ちているため、Kが影を追いかけて東に面した海へ入って行ったという想像に矛盾が生じる。そのため《もう一步想像を進め》て影の方向に工夫を施し、自身が組み立てたKの昇天を自然なものにしたのである。図三はKが溺死

(図三)



した夜の情景について、《私》が想像した図である。

第二章 Kと《私》と《あなた》

この章ではまずKと《私》と《あなた》の行動を時系列に沿って整理し、その後三人の関係性について考察する。視点主である《私》を軸に三人の行動を整理することで、Kと《私》と《あなた》の関係性を明らかにする。

第一節 三人の行動

まずはKの行動を追っていく。Kは《私》に、高等学校の寄宿舎にいたときがあると語っている。《私》は手紙の中で、当時のある経験がKの影への執着の発端であった可能性について触れているが、これがあくまで推測であることには留意したい。

その後Kは身体を思い、N海岸へ療養に向かう。そしてある満月の晩、砂浜へ出た際に《私》と出会って交流を持つ。その後一か月程度二人の友人関係は続くが、《私》が病から回復してN海岸を離れたことで交流は途切れる。その後どの程度の時間が経過したのかは定かでないが、満月の夜にKは海で溺死する。



次に《私》について記す。まず《私》は身体を患ってN海岸へ療養に行く。Kと出会ったのは《Nへ行つてはじめての満月の晩》ということであるから、Kとの邂逅は療養に行ってから一か月以内のこととなる。それから一か月程度Kと友好関係を築くが、病が小康を得たためN海岸を離れ、二人の交流は途切れる。そしてKの知人だと推察される《あなた》から手紙を受けてKの死を知り、返信のために筆を取る。この返信が「Kの昇天」の全文となっているとい

う体である。

最後に《あなた》についての描写であるが、これは他の二人に比べて圧倒的に少ない。明確に記されているのはKの溺死に際して《私》に手紙を送ったという一点のみである。

以下はこれらの行動を時系列順にまとめた表である。

(表)

K	《私》	《あなた》
高等学校に通う。(寄宿舎で影への執着に目覚める?)		 どこかでKと知り合う。 
身体を患い、N 海岸へ療養に行く。	身体を患い、N 海岸へ療養に行く。	
満月の晩に影を眺めていたところ、《私》と出会う。	《N へ行つてはじめての満月の晩》、Kと出会う。	
一か月程度《私》と交流を持つ。	一か月程度Kと交流を持つ。	
引き続きN 海岸で療養する。	やや健康を取り戻し、N 海岸を離れる。	
満月の晩に溺死する。		Kの溺死を知り、《私》へ手紙を書く。
	《あなた》からの手紙によってKの溺死を知り、返信を書く。	

第二節 三人の関係性

本節では、今までに言及したことを踏まえながら三人の関係性について考察する。

まず三人の中から二人を取り出して関係性を整理していく。《私》とKはN 海岸で出会ったのが初対面である。そこから一か月程度の交友期間を経て、《私》の回復と共に別れる。《私》が手紙を貰うまでKの死を知らなかったことや、《僅か一月ほどの間に、あの療養地のN 海岸で偶然にも、K 君と相識つたといふやうな》という《私》の語り口から、それ以降の交流は無かったのだと分かる。客観的に見れば浅い関係性であるが、Kからすると《私》との関係は非常に重要なものであったことが窺える。前述の通り砂浜で自身の影を見ていたKは、その影が立ち上がったように見える状況で《私》と出会い、《私》を自身のドッペルゲンガーであると認めた。二人の関係は、お互い病気の療養中であるという同一の立場から始まったにもかかわらず、《私》のみが寛解し、Kの病状は重くなつていく健康を取り戻して《生物の気配》が極まった《私》に、Kは自身の影を見た。その結果《私》と対照的な末路を迎えたのであろう。

ここで、梶井の作品におけるドッペルゲンガーの特性を述べておく。従来のイメージではドッペルゲンガーは不幸の象徴であり、それを見た人間は死亡したり、精神的に不安定になったりする。しかし、梶井の作品内ではその限りではない。「泥濘」を始めとして梶井はドッペルゲンガーを主題とした作品を複数執筆しているが、一貫してドッペルゲンガーは「本体に安寧をもたらすもの」として扱われている。この扱いに倣うなら、Kにとって溺死は安寧を伴った死、つまり昇天であったのだと言えるだろう。

もう一つ梶井によるドッベルゲンガー作品の特徴を挙げるならば、「自分が相手をどう見るか」という視点がテーマとなっている点であろう。梶井の作品では、実際に怪異としてのドッベルゲンガーが現れるというよりは、「登場人物が、自身のドッベルゲンガーを見たと思う」ことに重点が置かれている。Kと交流していた間、『私』にドッベルゲンガーとしての自覚は無い。しかし重要なのはKが「ドッベルゲンガーを見た」ことであって、ドッベルゲンガーとして視認された『私』の感情や言動は関係が無いのである。

『私』はある時Kの死を知り、そして自分自身がKのドッベルゲンガーとなっていたことを自覚する。そして筆を取り、Kの死に関する考察を描き出した。この手紙に、『私』による『告白』の意味を見る先行論は多い。島村は本作の中で『あなたは探偵の役割を担っており、『私』は『影』である自身が「Kの昇天」に深く関与していること』を『告白』していると述べている。また、水島は『私』が自身の中に現実と幻想の世界を同時に持ち合わせており、『その不可思議な世界観を「あなた」という架空の他人を設けて『告白』している』と述べている。しかし、架空の人物に『告白』するという行為に至るまで、『私』はKの死によって追いつめられていたのかは疑問である。手紙の口調は一貫して穏やかなものを保っており、また作中で『私』の体調が改善していることは明確に書かれている。架空の人物に救いを求めるほど精神衰弱が進んでいるとは考えにくい。

ここに、『私』がKのドッベルゲンガーであることが関係してくる。二人は相補的な関係を築いていたが、ドッベルゲンガーとはそもそも同一の人物が二人現れる現象である。つまり、『私』もK

と同じように、月に魅せられていたと考えられる。濱川は『私』が「ドッベルゲンゲル」を口笛で吹いていたことから『Kの説明以前に、すでに「私」の方にも、それを受容する素地のある』ことが示唆されていると述べ、また水島は『私』がKとの出会い以前から影を意識していることを指摘して『Kと懇意になるよりも前からすでに影にとらわれている』と主張した。

稿者はこれらの理由に加え、Kと『私』の同一性を示す描写について指摘したい。『のつべらばー』そんなことを不知不識の間に思つてゐました』という、Kに初めて相対する際の『私』の心情描写である。「のつべらばー」、つまりのつべらばうとは、顔にバーツを持たない妖怪の一種である。のつべらばうの話には「ある人が誰かに声をかけるが、振り返ったその顔にはバーツが無く非常に驚く」という雛形があり、『私』はKに声をかけるときこれを想起したのである。Kが初めて『私』を視認した時、月の逆光によってKからは『私』の表情が見えなかったはずである。Kと『私』はお互いを無貌の怪異ではないかと疑いながら出会った。ここに思考回路の相似が見える。二人が「月や影を意識している」「病気の療養中」「怪異的な出来事を受け入れる素地がある」などの点で、同一の人間として出会ったことが示されているのである。

『私』がKと同じように月に影に魅せられていたのなら、Kの死を知った後、その死について誰かに説明したいと思うのは当然ではないだろうか。Kを単なる溺死者としてではなく、憧れていた月へ昇天した者として描き出したいと考えるのは自然であるように思える。『私』にとって、Kは自身の憧れを叶えた者でもあるのである。しかし、それを説明するには観客が必要である。そこに『あなた』

が要請されたのだと稿者は主張する。

次に、『私』と『あなた』の関係性について述べる。まず『あなた』はKについて知っていなければならない。Kの死について疑問を持つ聴衆としての役割を持たせるためである。よって、『私』は『あなた』を、Kの生前からの知人として設定した。『私』がKとの関係の浅さを述べていることから、Kと『あなた』の付き合いは恐らくKと『私』との付き合いよりも長い。Kと親しい間柄であったのなら、『あなた』がKの死について思い悩み、『私』に手紙を出しても自然である。

次は本作の書き出しである。

お手紙によりますと、あなたはK君の溺死に就て、それが過失だつたらうか、自殺だつたらうか、自殺ならば、それが何に原因してゐるのだらう。或は不治の病をはかんで死んだのではなからうかと様ざまに思ひ悩んでゐられるやうであります。

作品冒頭で、『あなた』がKの溺死の要因について思い悩んでいることが示されている。ここで挙げられている死の原因は全て一般的なものである。『私』は、Kの死がここに示されるような単なる溺死であるというイメージを否定したかったのだと考えられる。そのため見当違いの予想をする『あなた』という架空の文通相手を創り出し、その返信という形で「Kの昇天」について解説を行ったのである。

しかし、『あなた』は『私』が創り出した架空の人物であるが故に、その設定には矛盾が生じる。以下は本編からの引用である。

・ 御存じでせうが、それはハイネの詩に作曲したもので、
・ あなたにもそれが突飛でありませうやうに、それは私にも實に突飛でした。

・ これがK君の口調でしたね。

『私』は『あなた』と面識がないにも関わらず、その反応を推しはかることができるような素振りを見せている。三つ目の引用についてはKと『あなた』が設定上知人であることから自然な確認であるとも言えるが、一つ目、二つ目については違和感を抱かざるを得ない。『私』は、『あなた』が音楽やKについて自分と同程度の知識を持っていると理解している。『私』と『あなた』に面識は無く、Kの死によってのみ繋がっているという設定では起こりえないことであり、ここに明確な矛盾が生じている。これは水島も既に指摘していることであり、同様に『あなた』が架空の人物であるという結論に至っていた。本稿ではこの結論から一歩踏み込み、『あなた』が『私』のドッペルゲンガーとなっているのだという主張を行いたい。

『私』が『あなた』を創作した以上、『あなた』の設定に『私』の要素が含まれることは当然である。特に文学的知識については、Kの昇天について理解する為『私』と同等のものを持っていていなくてはならない。また、二つ目の引用から、『あなた』はKの発言に対し『私』と同じ感想を抱くように設定されていると分かる。『私』と『あなた』は知識だけでなく、思考までもを共有しているのである。つまり『あなた』は「『私』から生まれた」「『私』と同じ知識・認識

を持つ」存在なのである。設定上、《私》と《あなた》にはKの死以前からの交流などは無く、手紙のやり取りはもちろん《一面識もない》ことが明確にされている。《私》から生まれた《私》と同一の存在が、会ったこともないままKの死因について《私》と同様に思いを巡らせている。《あなた》は非常にドッベルゲンガー的な性質を持っていると言えるのである。

しかし、ここで一つ矛盾が生じる。先に言及した《私》と《あなた》には《一面識もない》という設定である。見ることを重視する梶井の作品群の中で、《一面識もない》という描写が活きないとは考えにくい。事実梶井の作品においてドッベルゲンガーは視認するものであり、《私》と《一面識もない》のなら《あなた》はドッベルゲンガーになれるはずがないのである。

ここに作品の巧妙さがあるのだと稿者は指摘したい。《あなた》はドッベルゲンガー的性質を持つが、本体から視認されるというドッベルゲンガーになるための条件を満たしていない。梶井はこの一点の欠けによって、《私》と《あなた》の関係を希薄なままにし、《私》とKの相補的な関係を際立たせたのである。

村山麗¹⁰によれば、ドッベルゲンガーには「主となる人物と同等の一個体であるドッベルゲンガー」と「主となる人物が無ければ存在しないドッベルゲンガー」の二種類が存在する。前者は本体との精神的な類似が薄いものであり、後者は本体の精神の一部が実体として現れたものである。本作において《私》は後者の「Kがいなければ存在しないドッベルゲンガー」として描かれている。《私》はKの影であり、本体の持っていないものを持つドッベルゲンガーとしてKと相補的な関係を築いた。対して《あなた》は、いわば前者の

ドッベルゲンガーの性質を持っていると言えるのである。《あなた》はスペックについては《私》と同じ知識や認識を持っているものの、その行動原理については判然とせず、本体の知らぬ場所動き回っている。ドッベルゲンガーとしての役割を十分に果たしていると言えるだろう。

このドッベルゲンガーの描き方の違いには、Kと《私》の関係性を引き立てる効果がある。Kと《私》は相補的な関係にあり、片や月へ昇天、片や現実への適応と対照的な道を歩んでいる。このコントラストが作品の魅力の一つであると言えるだろう。しかし、《あなた》は《私》のドッベルゲンガーではあるものの、一つの個として独立している。後に言及するが、梶井にとつてKと《私》は、自分自身の異なる側面を投影した登場人物である。《私》と《あなた》に相補的な関係を想起させない仕掛けによって、Kと《私》という自身の二面性のコントラストがより引き立てられているのである。

第三節 構造と狙い

ここまでの考察によって、「Kの昇天」は精緻な計算のもと執筆された作品なのだと分かる。作者である梶井だけでなく《私》の思惑も複雑に絡み合う、非常にフィクションナルな作品であると言える。ここでこのフィクション性が成立する要因の一つとして「破綻した書簡体」があるのだと稿者は主張したい。

まず、書簡体小説は手紙の差出人の一人称語りによって進行するかつ、差出人は手紙に何を書き何を書かないかを選択することができるため、作中で起こった出来事全てが正確に記述されているとは限らない。この二つの要因によって、手紙に書かれている物事は、

作中において本当にあったことかどうか分からないという曖昧な立ち位置に置かれる。

次に、作品から具体性が排除されていることについてである。「Kの昇天」には、具体的な人物の名前や地名が一切登場しない。大塚常樹はこの匿名性が「Kの昇天」の非現実的な神秘性を支えていると指摘しているが、この具体性の排除には、構図という観点からも意味があると稿者は主張したい。ここまでの徹底的な固有名詞の排除を、三人称視点を用いる小説や一般的な一人称小説で行うのは難しい。それらの作品の進行には、便宜的であっても登場人物への名付けが必要である。「Kの昇天」は書簡体を、それも相手への返信をベースにしたからこそ具体性の排除に成功しているのだと言える。手紙は差出人と受取人の間で完結する読み物であるため、お互いに関する情報を改めて整理する必要は無い。登場人物の詳細を読者に伏せたまま物語を進行していくことが可能なのである。

梶井は「Kの昇天」に書簡体を採用することで、作品のフィクション性を保ったのだと稿者は推測する。梶井は自身の日記で、本作品について《爽快、創作の筆は主人公の書いてあるといふ小説になる。それは手紙体にて これになつてから筆に油がのる》と述べている。書簡体を採用してから筆が進んだということは、書簡体の特徴であるフィクション性の保証が、本作のテーマを表現するのに適していたということだろう。

作品のベースは書簡体となっているため、そこで語られる《私》の言説は全くの事実であるとは限らない、フィクション性の高いものとなっている。事実、《私》はKの内面を非常に幻想的なものであると想像していたり、Kが溺死した夜の状況を《もう一步想像を

進め》た形で予想していたりと、現実の出来事を正確に記述している訳ではない。明確な事実は、Kが溺死したという出来事のみである。Kが溺死した夜の状況については、《私》の想像を除けば、現実の数値を用いて正確に描写されている。梶井は空想を象徴する書簡体と現実を象徴する実際の月齢を用いて、「Kの昇天——或はKの溺死」というタイトルの通り、空想と現実の対比を表現したのでと稿者は主張する。

すると、作中における書簡体の破綻が矛盾点として浮上する。作品終盤において、《私》は想像でしかない筈のKの昇天の様子を、まるで目の前で見た事実かのように断定する口調で語っている。水島が指摘するように、これは伝聞体からは大きく外れており、書簡体の破綻が見られる。リアリティを薄れさせるといふ書簡体の特性を利用したのであれば、何故最後まで書簡体を用いなかったのかという疑問が発生するのである。

この疑問に対する答えは、梶井の日記の《創作の筆は主人公の書いてあるといふ小説になる》という記述から読み取ることができる。執筆当初、梶井は「Kの昇天」を、「主人公が書簡体を用いて書いている小説」といふ体の小説にする予定であった。しかし、完成した「Kの昇天」はあくまで梶井の書いた書簡体小説であり、主人公、つまり本作の語り手である《私》が書いているのは手紙である。この転換が書簡体の破綻に繋がったのではないかと推測できる。本作品が当初の予定通り「主人公が書簡体を用いて書いている小説」といふ体の小説であったならば、作中の手紙が小説であるということが明確に示されていたはずである。この記述を執筆途中で削除した結果、手紙の部分のみが残って「Kの昇天」として発表された

のではないだろうか。

添削前の作品が二重構造を前提に執筆されたのならば、作中作において書簡体が破綻していても問題は無い。「書簡体の小説」はあくまで創作であり、手紙そのものではないためである。手紙そのものではなく書簡体の小説であるなら、我々読者が「Kの昇天」を問題なく読めるように、破綻をある種の演出として読むことができる。また、「主人公が書いた小説」が破綻していても、その外側にある「梶井が書いた『Kの昇天』」が破綻していなければ一つの作品として成立する。

「Kの昇天」最終盤における書簡体の破綻は、梶井が「Kの昇天」を完成させる過程で、結果的に産まれたものだと推測する。

本作執筆時の梶井の日記¹⁴には《然し清書する間もなし》とあり、そこからこの破綻を梶井が犯したミスなのだと解釈する向きもあるだろう。しかしこの残された破綻は、伝聞体というクッションを外した結果産まれた迫真の語りによって、Kの溺死をよりドラマチックな昇天に仕立てるという効果を持っている。梶井はあえてこの破綻を活かすことによって、「Kの昇天」を描き切ったのである。

終章

ここまで、梶井が描いた「Kの昇天」について、舞台設定の整理やその情景が登場人物にもたらした効果を明らかにしてきた。また、それらから導き出される登場人物三人の関係性、そして《あなた》の正体について明らかにした。いわば《あなた》とは、《私》にとって、そして梶井にとっても都合のいいドッペルゲンガーなのである。最後に梶井が「Kの昇天」に込めた意図について述べる。「Kの

昇天」の研究史において、Kが月へ昇天していくことに、現実からの逃避願望を見る向きがある。月への憧憬を逃避として捉え、梶井は肉体的な生を賛歌しているという論調に、稿者は否を唱えたい。梶井にとって、月は理想の世界である。梶井が現実と理想どちらを選んだのかという軸の上ではなく、梶井がその双方に意欲的であったという認識の上でこそ「Kの昇天」はその魅力を十二分に発揮するだろう。「精神的な昇天を遂げ、月へ飛翔する側」と「身体として現実へのこり、歩いて行く側」の双方が、梶井にとって本意とするところなのである。

梶井はKと《私》、そして《あなた》という三人の登場人物の関係性を緻密に組み上げた。Kによる幻想的な月への飛翔と《私》による現実の受容を、《あなた》という架空の聴衆を交えながら表現しきったのである。「Kの昇天——或はKの溺死」というタイトルは、幻想と現実の二面性、相補性、そしてその双方を重視する梶井の立場を端的に表す見事なものだと言えるだろう。

注(1) 安藤靖彦『泥濘』と『Kの昇天』（『愛知県立大学説林』第三十五巻、

一九八七年二月）

(2) 濱川勝彦『梶井基次郎論』（翰林書房、二〇〇〇年）

(3) 島村輝『梶井基次郎『Kの昇天——或はKの溺死』』（『日本文学』第三十九巻第一号、一九九〇年一月）

(4) 水島佑『梶井基次郎『Kの昇天（或はKの溺死）』——《私》の二重性について——』（『成城国文学』第二十八巻、二〇一二年三月）

(5) (3)に同じ。

(6) Blenderにより作成。他図も同様。

- (7) (2)に同じ。
- (8) 国立天文台 暦計算室 <https://eocom.knrao.ac.jp/koyomi/> (二〇二三年九月三日閲覧)
- (9) 「ある崖上の感情」「闇の繪卷」「奎吉」「犬を売る露店」「瀬山の話」など。
- (10) 村山麗「^{ドツベルゲン}二重人格」の脅威——芥川龍之介「二つの手紙」論——
〔芥川龍之介研究〕第十三卷、二〇一九年七月
- (11) 大塚常樹「梶井基次郎『Kの昇天——或はKの溺死』の構造と戦略」
〔国文〕第九十四卷、二〇〇一年一月
- (12) 『梶井基次郎全集第二卷』（筑摩書房、一九九九年）
- (13) (4)に同じ。
- (14) (12)に同じ。

受贈雑誌(二)

かほよとり

武庫川女子大学大学院文学研究科・日本語日本文学専攻院生研究会

岐阜聖徳学園大学国語国文学

岐阜聖徳学園大学国語国文学会

京都教育大学国文学会誌

京都教育大学国文学会

京都語文

佛教大学国語国文学会

京都大学国文学論叢

京都大学大学院文学研究科国語国文学研究室

キリスト教文学研究

日本キリスト教文学会

金城日本語日本文化

金城学院大学日本語日本文化学会

近代

神戸大学「近代」発行会

群馬県立女子大学国文学研究

群馬県立女子大学国語国文学会

藝文研究

慶應義塾大学藝文学会

言語の研究

東京都立大学言語研究会

言語表現研究

兵庫教育大学言語表現学会

現代短歌

現代短歌社

現代日本語研究

大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座現代日本語学研究室

高知大國文

高知大学国語国文学会

國學院雑誌

國學院大學